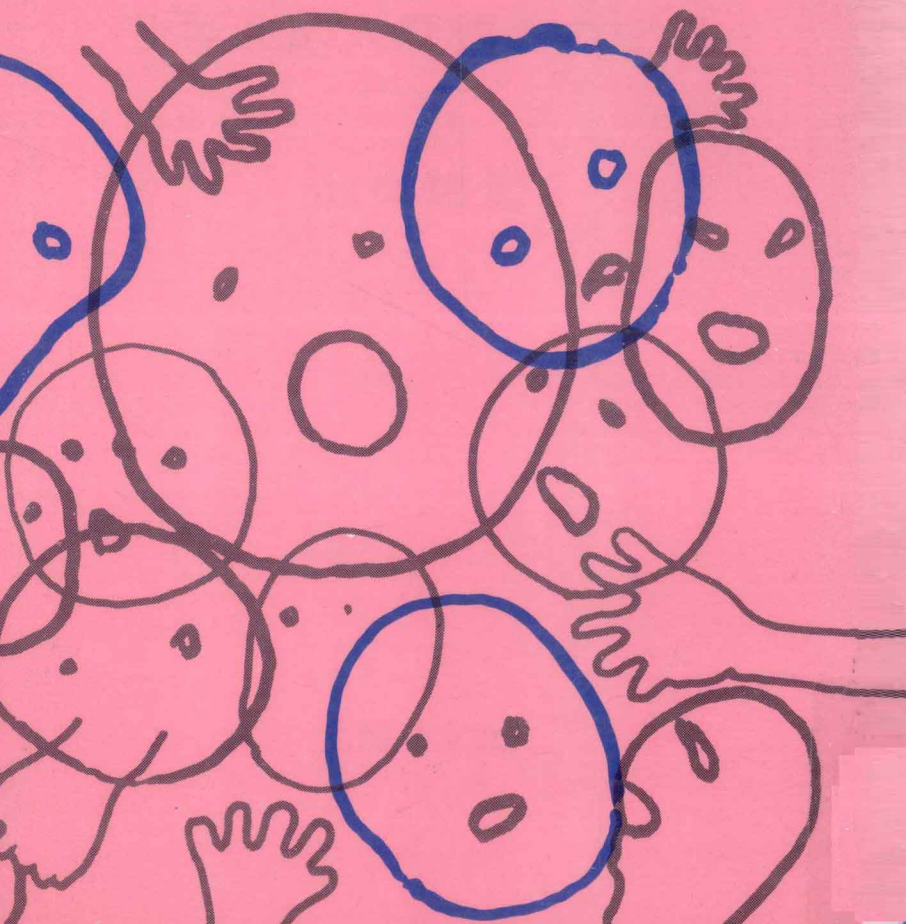


さるっ子と 眼鏡ざる先生

小学生の人間教育の記録

山口 耕 司



主婦の友社

山口耕司

さるつ子と

眼鏡ざる先生

小学生の人間教育の記録

著者との了解に
より、検印を廃
止します。

さるっ子と眼鏡ざる先生

定価／四五〇円

発行／昭和四十五年一月三十日初版

著者／山口耕司

発行者／石川数雄

印刷所／明善印刷株式会社

発行所／株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台一の六

郵便番号 一〇一

振替 東京一八〇番

電話 東京(二九四)一一一一(大代表)

もし落丁、乱丁その他不良な品がありましたら、おとりかえ
します。お買い求めの書店か本社へお申してください。

推薦のことば

京都大学教授

鯨あじ

坂さか

二つぎ

夫お

全巻を通じ、強く訴える感動がこもる。それは教壇に立つ者だけでなく、人の子の親、また子ども自身の魂の根底をはげしくゆさぶるほどの力である。

「ある両親は、友だちに負けるなと子どもをけしかける。ある母親は、友だちと仲よくとその人柄を大事にする。担任の私は、友だちを許し、自己の心に負けるなと励まさなくてはならない」

人間の教師の悩みがそこに描かれている。

「卒業式はいまだけなわ。子どもの名前を呼ぶ声はまだつづく。私はかく目を閉じて、子どもの夢とその現実との結びつきを考えながら、その本心をさぐろうとした。人には、その本心と本心とのふれ合う貴重な一瞬が

ある。私の一年間の教育に、果たしてそれがあつただろうか。先生という仕事は職業になつてから、教師は職業のなかでしか子どもを教えなくなつた。そして、教える者も、学ぶ者も容易に本心を見せなくなつたようだ。子ども「と共に」、子ども「の中に」生きようとする人の生命が、まざまざとにじみ出ている。

教育には大胆な冒険と、乙女のような繊細な心情が求められる。著者も言うように、「ほんとうの教師は渡しもり」だからである。ひろく、この書をすすめたい。

感動的な読み物

作家 吉村 昭
あきら

私は、この作品にすぐれた小説を読むのに似た感動をおぼえた。

この作品は、著者の分身と思われる一教師が、六年生の生徒を教育してゆく過程をえがいているが、単なる教師の記録ではない。問題の多い生徒、平凡な生徒のそれぞれの個性を見出し、その個性とのふれ合いを格調高い文章でたどっている。

世に教育評論家と称する人々が多いが、その一部の人々の言葉には理解しがたいものがある。子供は自由に放任すればよいなどと、妙に物わかりのよさそうなことを口にしたっているが、それはマスコミを意識した底意が見えて不愉快ですらある。これらの人々に共通している欠陥は、教育とはこういうもの

だとしたり顔に割り切っていることで、教育者としての苦悶が感じられない。

それと比較して、この作品の主人公である教師は、生徒を凝視し、かれらと共に悩み、泣き、笑い、そして絶えず教育者としての反省を怠らない。

生徒が反抗を示すと、この教師は、われわれ素人には意表をつくような言動をとる。しかしそれは決して意表をついたものではなく、これ以外にはあるまいと思われるきわめて適切な処置なのだ。そうしたやりとりにより、ちやうどパズルを解くような爽快な興味深さを感じるが、それはこの教師の深い知性を示したものののだろうか。

この一書は、子供というものを知るうえで、教育というものの意味を知るうえで、多くのかたがたに読んでいただきたいと思う。

目次

推薦のことば

感動的な読み物

京都大学教授 鯨坂二夫

作家 吉村昭

一学期

始業式……………8

最初の授業……………18

血豆……………30

掃除当番……………44

波……………55

C一……………68

模造真珠……………78

プール掃除……………91

二学期

林間学校……………106

夏休みボケ……………117

明るい日射し……………127

三 学 期

告白	139
爪跡	154
反抗	165
マンガとテレビっ子	175
子どもの輪	184
空席	194
初日の出	212
菊の花とバナナ	223
誤解	234
青少年赤十字	251
親と子	264
入学試験	277
卒業式	290

一 学 期

始 業 式

列の中から、歓声やため息がもれた。

全校生徒が校庭に並び、校長は朝礼台の上から学級担任の名を発表していた。指名された教師は、それぞれのクラスの前に立ってちょっと照れたり、にっこりしたり、無愛想に口もとを引きしめたりしている。

「三年一組、安藤先生。三年二組……」

校長の発表につづいて、

「まあ、うれしい」

「よかったわ」

「やさしいわよ、あの先生」

そんな子どもたちの声が、あからさまに列の中から湧きおこる。怖い教師や親しみのない教師が指名されると、子どもたちの口から一様にため息がもれた。子どもたちは、宝くじの当選発表を待つかのように、かたずを呑んで校長の口もとを見つめていた。すでに発表のすんだクラスは、めいめいガヤガヤと後はどうでもいいといった調子である。

しかし、それも三、四年生ぐらいいまでで、高学年になるとそれほど喜びや落胆をあらわにはしなかった。

私の時もそうであった。ほとんどの子は、静かに、むしろ、品定めするような複雑な表情をして

いる。小学校も最上級生になると、からだも心も児童期から抜け出すところで、うれしくてもそうでもない時もあまり顔には出さないものだ。

私は胸をはずませながら、問題の子どもが多いという六年一組の列の前に立った。そして、ひとりひとりの子どもの顔を見ていった。なかには笑顔もあったがほとんどの顔は、ひたかくしに自分の感情を抑えている。どことなく子どもらしさがなく、小さな殻に閉じこもって排他的にさえ見えたと。

——それぞれ、おもしろい顔をしている。このクラスの子は、一年生からずっと女の先生だったはずだ。男の先生になったら少しはうれしいだろうに……それとも、前の担任の藤川先生が、『私の手にはおえませんか、こんどは男の先生にうんと厳しくやってみます』とでも言ったのだろうか。

そう思いながら、私は澄んだ空を見上げ、それから視線を子どもたちの顔にうつした。

ようやく校長の話が終わった。

子どもたちは、マイクからながれる行進曲に合わせてそれぞれの教室へ入ってゆく。私はそのうしろ姿を見送りながら、これからの一年間、子どもたちが卒業するまで、まずどんなことから指導したらよいかと考えていた。

職員室に帰ると、去年まで受け持っていた藤川先生がさっそく話しかけてきた。

「よろしくお願いします。とても困った子どもたちですけど、先生ならなんとか……」

「いやあ、どうですか？ とにかくやってみます。心配いりませんよ」

「わがままを言って、すみません」

藤川先生は小声で答えて、そそくさと廊下へ去った。

わがままというのは、昨年受け持った子どもたちが手におえなくて、とうとう校長に泣きついて担任を変えてもらったことである。普通、五、六年生は引きつづき受け持つのが常識であるが、あと一年間のがまんができなかったたのであろう。その折り紙つきのクラスを私が受け持つことになったのである。

私は、一年生の持ち上がり^{びよう}を熱望していたが、どうしてもこの組を指導してほしいと校長や教頭から懇願された。数度の交渉ののち、しかたなく私は折れた。その時、校長は、

『父兄も、学校中で最もうるさ型がそろっているし、子どもの質もよくないらしい。先生の椅子にそつと鉾^{びよう}をさかさにおいたり、入り口の戸に、いきなり黒板消しが落ちてくるように仕掛けたり……相当なものだよ』

『それは、おもしろいクラスですね』

すると、横から教頭が口をはさんだ。

『藤川さんは熱心なんだが、年をとって、いささか愚痴っぽくなったからな。それで子どもが反抗したんだろう』

『とにかく君に頼みたいんだ』

と、校長が念をおした。『変わった子どもたちがたくさんいるらしいから、君には向いていると思う』

校長の言うとおり、私は特殊学級の担任をここ数年来希望していた。しかし、私の学校にはそれがない。学校全体の立場からいえば、断わるわけにはゆかなかった。

——どんな子どもたちであらうか。かえって優れた子どもたちが、反抗精神を見せる場合もあるわけだ。ともかく、新学期はスタートしたのだ、ためらっているわけにはゆかない。裸で子どもたちの胸に飛びこんでゆけばなんとかなるだろう。前向きにやるよりほかに方法はない。

階段を上がり、音楽室のかどを曲がると、突きあたりから四つ目の教室が六年一組である。

——偏見を捨てて、素直な心で子どもたちとぶつかり合おう。

教室に近づくと、窓からのぞいていた顔が素早く引っこんだ。

「おい、先生が来たぞ！」

大きくて無遠慮な声である。教室の方向が急に静かになった。スリッパの音が長い廊下に反響する。子どもたちは、新しい教室で会う私に、希望と不安と多少の羞恥をいだいていることだろう。私も、一年ぼうずの小さい子どもたちを手放して、急に大きな子どもとの相手をするときどきを、わずかながら感じていた。

笑顔で教室の入り口に立つと、子どもたちは神妙な顔つきで乱れた席についていた。しかし、一様にその表情はかたい。にこにこして私を迎えてくれた一年ぼうずとは勝手が違うようである。黒板を背にして立つと、

「気をつけーい」

と、変にふざけた声がかかった。風変わりな数名の子どものうち、だれか威勢のいいのがかけたのであろう。どっと笑声がわいた。

「みんな楽しそうだね」

私の声に、子どもたちは急に口を閉ざした。

ひとわたり表情を見てゆくと、うつむいたままとなりの子と何かささやき合っている子ども、股をおしひらき机におおいかぶさって下から私を見上げているニキビ面のおとなびた視線、うしろの子とつき合って黄色い前歯をのぞかせている子ども……なかには神妙な眼差しでこちらを注目している子どももあったが、そのほとんどの顔が、自我の抑制がたりないことなく動物じみたものと思われた。

——これは人間の顔ではない。どうして、こんな眼つきや顔つきになったのだろう。

私は、一年ぼろと同じように、最初から正確に教える必要があると思った。

「さあ、みんないい姿勢をしてごらん。そんな姿勢では、これからしっかりやろうとする心構えは見えないぞ。いちばんよい姿勢をしなさい」

少し厳しい口調で言うてから、黒板に『サルの顔』と大きく書いた。少しひどすぎるようにも思ったが、ほんとうのことを教えるのが教育だと考えたのだ。

——サルの顔、人間性のない顔、抑制美のない衝動的な顔、荒れてカサカサに乾いた心がむきだしになっている顔、がさつで思いやりがなく、知的なものや心にゆとりのない顔……生活自体が、荒れてうるおいがないのだろうか。いつか藤川先生が、『静かになってまじめにやるのは、テストの時だけなんです。その時はみんな真剣になるんですが』と、顔をくもらせたことがあった。テストや余ったプリントをさせておけば、静かに鉛筆をもって机に向かうかもしれないが、それでは人間性は育たないだろう。

しばらく黙って考えごとをしていると、いつの間にか子どもたちも静かになった。そして、黒板の文字と私の顔を見くらべている。

私は、なぜ正しい姿勢がたいせつなのか、どうして動物じみた顔つきになるのか、眼の前の子どもから受けとるものにふれて話しはじめた。子どもたちの眼差しが、かなり真剣になってきた。だが、六年生にもなると、子どもたちはたいへん理屈っぽくなって、筋道のおった話でないと耳をかたむけてくれない。『こうしなさい』というだけでは納得なっとくしないのである。私は、じゅんじゅんと心の内面がその人の顔に現われてくることを具体的に話していった。

「電車やバスの中で、時おり気品のある人に会うことがあるでしょう。先生は早くから母親をなくしたから、あんなおばあさんが私のおかあさんならいいなあと、いくどか思ったことがある。それは決して、美しく整った顔ではない。鼻や口もとがゆがんだ醜い顔でも、美しい顔があるものだ」
いささが、子どもには高級すぎる話かもしれない。すると、後方の席の瘦やせて長身の子どもが、机の両端をもって立ち上がった。

「先生ねえ、ぼくたちもさあ、現代っ子でしょう。現代っ子は、どうしてサル顔になりやすいんですか？」

「そんなふうに、先生の前だってだれの前だって、遠慮なく自分の考えが言えるでしょう。それはとてもいいところだ」

いささか英雄気どりであった男の子は、ほめられて氣勢をそがれたようすだった。私はさらにことばをつづけた。

「いつの時代でもそうだが、いいところばかりじゃないよ。現代は、特にたいせつなことが欠けていると思う。たとえばね、口先ではうまいことを言うけど実行力がないとか、根気づよさがなくて無責任だとか、自分を棚に上げて他人を攻撃したがる傾向があるとか、これからゆっくり話してゆ

くつもりだが、いま君たちの顔をひとりひとり見てゆくと精神的なつよいものが心の中にないようだ。友だちに平気で迷惑をかけている子どもは、やはり、そういう顔つきをしているよ」

私は視線をめぐらせながら、この一年間に、人間としての土台をつくらなくてはならないとつく思った。

その時、窓がわの小柄な子どもが、色白の頬をふくらませて言った。

「先生、ぼくはどんな子か、顔だけ見てわかりますか？」

早口である。名前を聞くと山田伍郎だという。

「君はね、甘えん坊だよ。よく、おばあさんからそう言われるだろう」

「当たったあ」

「おばあさんに口答えをしたり、テレビにかじりついて『少しは勉強なさい』と言われても、なかなかやる気にならなかったり、気が向くとやるが、ふだんはちっともやらないような顔つきをしている」

「よく当たるなあ」

私は眼を細めて、その落ちつきのない子どもを見た。

「だからね、きょうからは口答えをしないと心に決めて、じっと自分の心と戦うことが今の君にはいちばんたいせつなことだ」

私は、自分の言い方が少しくどいように思って、まだ言いたくないこともあったが途中で話をやめた。すると、こんどはたくさんの手が上があった。

「先生、ぼくは？」